

広開土王陵碑文のいわゆる辛卯年条について

高 寛 敏

目 次

はじめに

1. 辛卯年条前置文説について
2. 「属民」と「臣民」
3. 辛卯年条私釈

おわりに

はじめに

『広開土王陵碑文』（以下『碑文』）は、四～五世紀の東アジア史の実相を伝える第一級の史料として、つとに名高い。特にそのいわゆる辛卯年条は、三二字の短文であるが、そこには百済・新羅・倭が複雑な関係を結びながら登場し、高句麗を中心とする当時の東アジア情勢が、「属民」・「臣民」の語を混えて集約的に叙述されている。この一文は、征討記事全般の解釈をも左右する、実に重要な記事であるが、なかに三字の欠字を含むこともあって、複雑な論議の対象となって、今に至っている。

本稿では、まず第一章で、日本の学界で現在、通説的立場にたつ、辛卯年前置文説について検討を加える。第二章では、辛卯年条解釈の鍵となる「属民」・「臣民」の意味を考察し、それに基づいて、第三章で私釈を提示したい。

文中、『碑文』は武田幸男氏釈文⁽¹⁾に従いながらも、適時、他の釈文をも参照することにする。なお、『碑文』は、基本的に現代漢字文で引用することにしたい。

1. 辛卯年条前置文説について

『碑文』辛卯年条は次のとおりである。

百残新羅旧是属民由来朝貢而倭以辛卯年来

渡□破百残□□新羅以為臣民。

現在、辛卯年条についての解釈で通説的位置にあるのは、浜田耕策⁽²⁾・武田幸男⁽³⁾の両氏によって体系化された前置文説である。

浜田氏によると、『碑文』征討記事は、「王躬率」型と「教遣」型かのどちらかであり、前者は必ず王親征の理由（高句麗にとって、不利な情況）を表わす前置文を伴う。辛卯年条は、「王躬率」型の六年丙申条の直前にあり、六年丙申条自体は前置文を含まないので、辛卯年条は六年丙申条の前置文である。それゆえ、それは高句麗にとって不利な情況を示す文章で、結局、その読解は従来からのものが最も妥当であり、「百済と新羅は、ともに以前から高句麗の属民であって朝貢を続けていた。ところが、倭が辛卯年に海を渡って朝鮮半島に侵入するや、百済を破り、さらには新羅をも討ってこの二国を臣民としてしまった」となる。

しかし、このように釈読すると、従来から指摘されているように⁽⁴⁾辛卯年（三九一）に倭が百済・新羅を臣民にしたとあるのに、六年丙申（三九六）で、広開土王は倭を討たずに百済だけを討っていること、また、高句麗は同じく倭の臣民になった新羅を討たなかったばかりか、新羅を臣民にしていたはずの倭が九年己亥（三九九）に新羅に侵攻し、それを高句麗軍が救っていることなど、文脈展開に矛盾が生ずる。

それにたいし浜田氏は、辛卯年条は六年丙申条の前置文であるだけでなく、それ以下に続く、広開土王の南方征討記事全般にかかる大前置文で、しかもそれは、史臣が「百済征討や新羅救援、倭寇潰敗戦に至った大前提として設定した虚構」であるから、辛卯年条の一節を基本として、各征討記事との文脈を追求する説は根拠がないと論じた。

浜田氏の指摘のように、征討記事はみな「王躬率」型か「教遣」型に属し、前者には必ず前置文が配置されている。したがって、辛卯年条が六年丙申条の前置文の機能を果す文章であることは確実である。しかし、辛卯年条は南方征討記事の冒頭に配されているその特殊性からして、それが前置文そのものであるかどうかは、さらに検討を要する。その正否は、征討記事全般と整合的な理解が可能かどうかにかかっているのである。

結論的にいって、浜田説は三つの点で疑問がある。

第一は、浜田説に従うと、征討記事には前述のように、文脈上の矛盾が続出するのであるが、浜田説はそれに充分答えていないことである。文章・文脈上の論理と、文章内容の事実如何とは、相対的な独自性をもつのであって、いくら内容が誇張と虚構に満ちていようと、文章論理自体は通じなければならない。文脈が通じなければ、それは文章ではない。辛卯年条が大前置文であるから、文脈は適当でよいという論理は成立しないのである。

浜田説を基本的に認めながら、それを修正・補足した武田幸男氏⁶⁾は、次のように論ずる。

「すなわち通説では、百残は辛卯年に、または辛卯年以来倭に破られ、倭の臣民となっていたというのであるから、百残は高句麗勢力の圏外にあり、高句麗とは敵対・隣対関係にあるのであって、それゆえ高句麗王の親征で討伐されるに充分で正当な理由があった」。また、高句麗はなぜ百済だけを討ち、新羅を討たなかったかという問題については、「『碑文』に即した論証はかなりむずかしい。」としながらも、「六年丙申当時、百済と新羅はともに高句麗の戦略的な敵性国であり、その可能性は「永樂九年己亥まで続いた」。しかし、六年丙申当時は、「戦術的にはまず百済が攻伐の具体的な目標とされ」、新羅攻伐は「戦術上回避された」。さらに、高句麗が倭を討たなかったことにたいしては、「やはりその当時、倭は百残・新羅をこえ、それよりはるか南方海上に本拠地をもっていて、戦術上の直接的な攻撃目標とは定め難かったと考えてよい。」と論述した。

武田氏の説明は、一見論理的に構成されているようにみえるが、問題は、『碑文』自体からそのような説明が可能なのかどうかである。

六年丙申に百済を討ったことについての武田氏の説明は、いかにももって回った苦しい論法であるが、やはり問題は新羅の場合である。前置文説では、辛卯年に倭は新羅を臣民にした、九年己亥に倭は新羅に侵攻したとなるが、これは明らかに文章論理の逆転である。文章自体が破綻しているのである。いま問われているのは文脈・文章論理であって、事実の問題ではない。武田説はこの文脈の矛盾に答えるかわりに、

『碑文』自体やその他の史料から一向うかがえない「戦略戦術」の問題にすり変えたといわざるをえない。武田氏自身が疑念を表明したように、『碑文』に即した説明は困難なのである。

前置文説は主に型式論理から導き出されたものであるから、それは文意・文脈によって検証されねばならない。内容が型式を規定するのであって、その逆でないことはいうまでもない。辛卯年条が虚構であれ、高句麗の戦略戦術がどうであれ、文意は自然に通じなければならない。前置文説にたつて『碑文』を読めば、読者の思考が混乱することは避けられない。辛卯年条の解釈が分れるのは、三つの欠字があるためである。それが釈文可能なら、辛卯年条の解釈で異論の出る余地がない。それをどう補ってみても、前置文説では論理が通じないのである。

第二に、「臣民」の問題がある。

浜田説によれば、百済・新羅は高句麗の「属民」であったが、辛卯年以来、倭の「臣民」になったことになる。ここでは「属民」と「臣民」が対比的に用いられているが、そうすると、より従属度の強いことが想定される「臣民」なる表現を、『碑文』の主人公たる高句麗の場合でなく、倭の場合に用いたことになるが、そのようなことが考えられるのか、という疑問が生ずるのである。

浜田氏は、この点について、冒頭の「属民」と重複することを避け、「臣民」と表現したにすぎないとして、特別の意義を認めていない。辛卯年条虚構説にたつ同氏としてはありうべき説明であるが、事はそう簡単ではなさそうであ

る。

武田氏は⁽⁶⁾「臣民」，「属民」に関連して，「ともに隷属関係を意味するが、『碑文』がえて同じ用語を使わなかったのは，後者が高句麗を支配者とする場合に限られ，前者はそれ以外の場合という違いがあったようにみえる。」とする。氏も「属民」と「臣民」との間に質的な差はあまり認めていない。

百済・新羅が倭の「臣民」になったということについての事実認識では，両者の間に隔りがある。浜田説ではそれはただの虚構なのであるが，武田説では『碑文』の「破」に関係するという。百済の場合は，「辛卯年頃から従来の倭との関係を強めて倭の勢力を導き入れ，おそらく高句麗の南下に備えたが，他方，高句麗は憎き百済に対応したただならぬ倭の動向を察知し，その情勢について倭が百済を破ったものと，はなはだ重大に認識したのであろう。」そして新羅の場合は，辛卯年のころ倭に人質の末斯欣を送ったものとおもわれる⁽⁷⁾が，それが「□□新羅」や「臣民」の認識にされたのであろう。」とする。

武田氏の事実認識から検討しよう。まず百済が高句麗に対抗して倭を導入したことが，倭が百済を「破」って臣民にしたと，高句麗の方が理解したというのである。しかしそんなことはありえない。六年丙申に高句麗は百済の首都を包囲したうえ，百済王を降伏させ，王弟と大臣10人を捕虜にして連れ帰った。一〇年庚子には，新羅の首都に侵入した倭を駆逐し，新羅王を臣属させた。それゆえ，百済・新羅・倭の相互関係については正確に認識していたと考えてよく，事実と全く異なる情勢認識を，戦後の『碑文』作製当時に至るまでももち続けていたなどとは，ありえないことである。実際，九年己亥条では，百済・倭関係を「和通」と表現しているのである。武田氏は，『日本書紀』応神三年（三九二年相当）是歳条の「百済辰斯王立之，失礼於貴国天皇」以下にも注目するのであるが，それに史料価値は認めるのは無理であろう⁽⁷⁾。

新羅の場合は，末斯欣入倭が「臣民」の認識になったとするのであるが，末斯欣入倭は『三国史記』では四〇二年，『三国遺事』では三九

一年である。武田氏は後者の年次を重視するが，そのようにする根拠はない。この頃の年次は『三国史記』の方に信頼性があるのであり，末斯欣入倭が四〇二年であるなら，その意味も異なったものになり，辛卯年との関係もない。末斯欣は十年庚子（四〇〇）の新羅救援戦の後，高句麗の指示によって倭に講和使として派遣されたものと考えられるのである⁽⁸⁾。新羅の場合も，武田氏の所論に根拠らしきものを認めることはできない。

それでは浜田説のように，辛卯年条は虚構で固められたのか。それも極論であろう。浜田氏は，「百済新羅旧是属民由来朝貢」が虚構であるから，後半部分も虚構であるとする。しかし後述のように，それは虚構と極論することはできない。

要するに，倭が百済・新羅を「臣民」にしたという事実はなにもなく，それは文章表現の問題としてもありえないことである。そして『碑文』の示す国際関係のなかには，「属民」と区別される「臣民」関係が，後述するように，他に確認することができるのである。

第三に，「倭以辛卯年来渡□破」の読法である。浜田説によると，倭の位置からして「□」は「海」などを想定することになるが，同じく位置関係からして，「来りて□を渡る」とも読めないし，語法からして「□を来渡する」とも読めない。そこで西嶋定生氏⁽⁹⁾によって，主語の倭を受ける最初の述語を「渡」とし，「以辛卯年来」を「辛卯年以来」のように読む案が出された。しかし，このような語法は決して一般的でないことが気にかかる。特に『碑文』には，「自此以来」（八年戊戌条），「從今以後」（六年丙申条），「自上祖先王以来」（守墓人烟戸条），「自今以後」（同上）などとあって，「以…来」のような例は他にない⁽¹⁰⁾。やはりここは「来」で断句とするのが自然で，そうすると「渡」の主語は倭にならず，ここで主語が変わる可能性がある。「倭が来りて□を渡る」とはならないからである。

以上のように，前置文説は，形式上は疑問の余地なきようにみえるが，文意を検討すると，それはあまりにも矛盾が多い。前置文説が明ら

かにしたのは、辛卯年条が前置文の機能を果たしているということであって、それが前置文そのものであるかどうかは、さらに検討を要するのである。

2. 「属民」と「臣民」

『碑文』によれば、広開土王以前から百済・新羅・東夫余は高句麗の「属民」であった。辛卯年条の「百残新羅旧是属民由来朝貢」、二〇年庚戌条の「東夫余旧是鄒牟王属民」の文言がそれを証明する。

しかし、これには傍証が欠けること、特に百済が辛卯年頃まで「属民」であったというのは事実と反することなどから、それは誇張とみるのが一般的であった。従来の見解を一步進めた武田氏⁽¹¹⁾、百済と夫余にたいする高句麗の本源意識と、新羅とのかなり古くからの交渉を前提として、「朝貢と属民のことは始祖の鄒牟王より以後、太古より以来というきわめて長期的な展望のもとで理解できる。」、あるいは、「それは当時の現実をへだたるはるか以前のことに属し、回想的な太古観の一齣にすぎなかったとおもわれる。」とか理解するにとどまった。

「属民」とは、たぶん同族意識に裏うちされた表現と思われるが、それは二国間の関係にたいする認識の表現であるから、確かにそれはたんに観念的なものである可能性もある。一方、「朝貢」とは二国間の交流・行動に基因する表現であるから、その事実を完全に否定することは困難である。いくら誇張でも、無関係であったものを「朝貢」していたとはいえない。「朝貢」とは、名分的なものから実質的な従属を意味するものまで、その内在する意味は幅広いが、広い意味で「朝貢」していたことは否定しがたい。

「属民」とは、「朝貢」という行動を媒介にして成立した認識であることに留意すれば、それもまた一定の現実的根拠をもっていたと考えるべきである。そうでなく、それを一律に誇張としたり、また本源意識や回想的な太古感としたのでは、百済・新羅を「属民」、東夫余を「鄒牟王属民」として書き分けている意味を、

充分説明することはできないであろう。

別稿で論じたように⁽¹²⁾、高句麗では広開土王期頃には、始祖鄒牟王が北沃沮を征服したと信じられていた。その北沃沮に、戦乱のなかを落ちのびた夫余王族によって、東夫余が三世紀末に建国されたのであるが、建国当初、東夫余は高句麗に事大の礼をとって「朝貢」していたことは、充分想像のつくところである。それはまさに、建国当初の高句麗と夫余関係の逆であって、夫余から自立・建国した高句麗が、大国夫余の圧力を排するにいかに関心したかは『三国史記』高句麗本紀に詳しい（琉璃明王一四年春正月，二八年秋八月条）。「鄒牟王属民」とは、鄒牟王征服の地に建国し、高句麗に「朝貢」したという意味であって、それは単なる本源意識の発露ではない。それは全面的に事実とはいえないが、当時の高句麗人にとってそう把握されるべき歴史的根拠があったのであり、実感であった。そうすれば、「中叛不貢」もたんなる征討名分でありえず、「不貢」の事態が実際にあったと考えられよう。

東夫余の例からすると、百済・新羅についても慎重に対処する必要が生ずる。

まず新羅である。新羅が三七七年に前秦に派遣した使者（『資治通鑑』晋紀二六・太元二年条）は、高句麗使に伴隨したこと、三八二年に「新羅国王楼寒」が同じ前秦に遣使した（『太平御覧』卷七八一・東夷二・新羅）が、これも高句麗に導かれたものと推察され、特に「楼寒」というのは新羅王号の「麻立干」の対訳であり、それは高句麗の「莫離支」に起源をもつということを⁽¹³⁾想起すれば、既にこの時までに、高句麗の影響は深く新羅に浸透していたのである。新羅は、高句麗に「朝貢」し、「属民」として把握されていたといつてよいであろう。三九二年の実聖入質は後述のように、この「属民・朝貢」関係の一層の深化を意味するものであって、決してその始まりを意味するものではない。

百済は三六〇年代以後、太子近仇首の主導下で、高句麗に対抗し、軍事・外交上の成果を納めた。しかし、それ以前に百済が高句麗に「朝貢」していなかったという保証はない。四世紀の前半から中葉は、比流王・契王と近肖古王前

半にかかるが、『三国史記』はその間、内臣佐平の任命や内臣佐平優福の反乱、新羅遣使などの記事を除いては、具体的な歴史的事実をほとんど伝えていない。すくなくとも四世紀以後には、高句麗と百済は隣対関係にあり、外交上の接触はひんばんであったはずなのである。

山尾幸久氏は⁽¹⁴⁾、『晋書』慕容皝伝に録された記室參軍封裕の上書に、「句麗・百済及宇文・段部之人、皆兵勢所徙、非如中国慕義而至、咸有思歸之心。」とあって、前燕軍の捕虜として高句麗人とともに百済人があげられていることに注目し、「四世紀前半の百済が、高句麗に服属して、その軍勢力の一端を担って」いたと指摘したが、参考にすべき見解と思われる。すくなくとも四世紀以後、高句麗は百済・新羅と隣接・交流していたことは確実なのである。その際、圧倒的な軍勢力と先進的な文化をもった高句麗が、大国としての立場にたち、他の二国に対したことも当然である。百済・新羅は、高句麗にたいして警戒心を抱きながらも、そのような交流を通じて自己を保存し、高句麗文化を積極的に吸収していったものと考えられる。それが時には、軍事的協力へと進展した事態も、視野に入れておく必要のあることである。

結論的にいって、『碑文』には現実から全く遊離した誇張はない。もちろん、百済の場合、辛卯年頃まで高句麗に「朝貢」していたのではない。それを無視した表現になったのは、文章を簡略化したためであったが、詳細は後述することにする。

さて、かつて「属民」と把握されていた百済・新羅・東夫余は、広開土王の征討の結果、どのような位置にたつようになったのか、新羅の場合を中心に検討することにする。

新羅の高句麗にたいする「属民・朝貢」関係は、三九二年の実聖入質によって一層深化した。『三国史記』によると、広開土王の百済攻撃は即位直後の三九二年から開始されているが、この百済征討戦と実聖入質は無関係ではなく、百済征討戦に新羅も参軍するようになったものと推察される。百済が倭と和通し、その倭が永樂九年に新羅に侵攻したのはそのためであった⁽¹⁵⁾。

永樂九年の倭の侵入に際し、新羅は高句麗に

救援を求めた。そのことを『碑文』は次のように記す。

九年己亥、百残違誓与倭和通、王巡下平穰、而新羅遣使白王云、倭人満其国境、潰破城池、以奴客為民、歸王請命、太王恩慈称其忠誠、□遣使還告以□計。

そこで、新羅王が広開土王にたいし、「歸王請命」したこと、それにたいし、広開土王が「称其忠誠」したことからすると、新羅の従属度はまたさらに質的な深まりをみせたことがわかる。その実態を明らかにするためには、論議の多い「以奴客為民」の意味を明らかにする必要がある。

該句は、従来、「奴客（新羅王）を以て（倭の民とした）」と、釈読されてきた。それに異説を唱えたのは鄭寅普氏⁽¹⁶⁾で、鄭氏は、これは新羅人が「以為うに、奴客はそもそも太王の民である」といって、高句麗に救援を求めた意味とした。これを受け継いだ朴時亨氏は⁽¹⁷⁾、倭人は国境に侵入しただけなのに、どうして倭が新羅王を民とすることができると、また、高句麗に救援を要請して倭を撃退しようにしている時なのに、このような表現を用いることがありうるのか、という疑問を提起し、さらに倭が新羅王を民としたなどという歴史的事実はないことをあげて、従来の釈読を否定した。そして、「奴客（新羅王）の（高句麗王の）民たるを以て」とする釈読を提示した。

浜田氏は、「倭人が国境の城池を潰破しただけで、すぐさま新羅王を臣下にしたと解するのは早計である。」としながらも、朴説を否定する。その理由は、「其国境」の「其」にみられるごとく、新羅王の上訴文のなかには、高句麗の立場からの間接話法が投入されているが、「奴客」の表現もそうであること、また「奴客」には、治者側が被治者一般を蔑視した蔑称の用法も存することから、「奴客」を、「新羅人一般」と解すると、朴氏が提起した疑問は氷解するということにある。

『碑文』には、もう一例の「奴客」がある。永樂六年条の百済王自誓の辞に、「從今以後永為奴客」とあるのがそれである。この「奴客」の実体が百済王であることに異論はないが、そ

れを踏まえて武田氏は、永樂九年条の「奴客」は「百済人」であるとする⁽¹⁸⁾。つまり『碑文』では、「奴客」の語は百済にたいしてだけ選択的に用いられたと判断し、該句は「以前から高句麗（王）の奴客〔になっている百済（主）〕を以て〔倭の〕民としてしまっております。」の意味に解釈するのである。

まず、武田説について検討しよう。

九年己亥条は、最初に「百残違誓与倭和通」として、百済・倭関係は「和通」と表現している。その同じ百済・倭関係を、同じ九年己亥条で、「百済が倭の民」となっていると表現するなどということは到底ありえないことであろう。

また、「奴客」が『碑文』では百済だけを指すというのも、独断的である。『牟頭婁墓誌』で、広開土王の臣下である牟頭婁が、「奴客牟頭婁」と自称したように、この時代に「奴客」は臣下の卑称として一般的に用いられていた。したがって、『碑文』の読者である高句麗人にとって、「奴客」とは特定の対象を指す言葉としては理解されなかった。その実体は、どこまでも文脈の中で明らかにされるべきものであるが、文脈からは「百済人」であるなどと理解することは不可能である。最初に「百残」と提示しておきながら、急になんの説明なしに、それを「奴客」と言いかえたというのも、また倭人の新羅侵入状況を述べて救援を要請するくだりで、急に百済へ話題を転ずるというのも一般の文章理解の枠を越えるものである。

浜田説のように、「奴客」を「新羅人」とみるのにも疑問が残る。なぜなら、浜田氏は、「奴客」を「新羅人」一般と解釈しても、当該条にたいする一定の説明が可能であるということを書いてあるが、それが「新羅王」でないという、積極的な根拠を提示していないからである。

この「奴客」の実体を考えるうえに、『三国史記』高句麗本紀・第九・宝蔵王四年（六四五）条（『資治通鑑』引用）は、参考になる記事である。即ち、高延寿・高惠真指揮下の高句麗軍が、唐軍に包囲されて降服するが、その時のことを、

延寿・惠真，帥其衆三万六千八百人，請降，

入軍門拜伏，請命。

と記し、さらに唐の安市城攻撃に際し、二人の語った言葉を、

請於帝曰、奴既委身大国、不敢不献其誠。と伝えている。ここに「拜伏」・「請命」・「奴」・「委身」・「献誠」などの言葉が、降服者、臣下の言動としてみえることに留意する必要がある。これらを、六年丙申条の百済王降服の記事、

跪王自誓、從今以後永為奴客、太王恩赦先迷之愆、録其後順之誠。

と比較すると、「跪王」には「拜伏」・「委身」が、「奴客」には「奴」、「後順之誠」には「献誠」が対応し、この時、百済王は、降服者としてだけでなく、高句麗王の臣下としてたち現われていることがわかる。「奴客」自体が臣下の卑称であるから、それはまた当然のことといえる。

新羅王上訴文のなかにある言葉もこれらと共通する。即ち、「奴客」・「請命」はもちろん、「帰王」は「拜伏」・「跪王」などに、「忠誠」は「献誠」などに対応しているのである。新羅は戦敗国でなく、また新羅王が高句麗王に面していないので「帰王」としたが、それは実質的には「拜伏」・「跪王」などとなんら異なるところがない。新羅王も高句麗王の臣下として現出しているといえる。

結局、新羅王上訴の辞は、百済王自誓の辞と同内容なのである。つまり、新羅王自誓の型式をとって、新羅王の服属を表現しているのであり、「奴客」・「帰王請命」・「忠誠」などは新羅王自誓に関連する、一連の表現であって、「奴客」だけを切り離して、孤立的に解釈することは誤りであることがわかる。「奴客」はやはり、「帰王請命」の主語たる、新羅王そのものでなければならない。「奴客」とは、『碑文』においては服属国の王の自称として用いられているのである。百済の場合は百済王で、新羅の場合は新羅人一般を指すというのでは、いたずらに読者の理解を混乱させることになる。

「奴客」の実体が新羅王であることは、それが「太王」と一体となって現出していることからわかる。

征討記事中の広開土王は、一般的には「王」と表現されている。しかし、特に「太王」と表現されたところが三箇所ある。そのなかでも一〇年庚子条では、

昔新羅寐錦未有身来論事□□□□□開土
境好太王□□□□寐錦□□□勾□□□□朝
貢

とあって、例外的にほとんどフルネームで記されている（完全なフルネームは、第一段の国岡上広開土境平安好太王である）。この部分は欠字が多く解釈が困難であるが、新羅救援の結果、初めて新羅王躬ら高句麗に朝貢・論事したことを述べたものとみて間違いない。文脈からすると、中間部分は「故国岡上広開土境好太王教招新羅寐錦」などのように補ってみることもでき、特に「寐錦」の上二字に「新羅」の二字が銘記されていたことは、ほとんど確定的と思われる。要するに、ここでは広開土王と新羅王が対置されているのである。征討記事中の唯一の、広開土王にたいするこの表現は、まさにここにその理由があるのである。新羅は高句麗の軍事占領下にあり、新羅王が躬ら高句麗に朝貢するという極度の隷属下にはあったが、一方では、「新羅土内」（『中原高句麗碑文』）の主権者として広開土王に相対している。この「新羅寐錦」を服属させる超越的存在として、それにふさわしい権威をもって、フルネームの「太王」として登場しているのである。『碑文』第三段の守墓人烟戸に二度登場する広開土王が、いずれもこれと同じフルネームに近い表現であるのも、意味は同じである。それは「存時教言」の主語であり、「制令」発布の主体である。広開土王の命令が国家の公法として、巨大な碑石を通じて高句麗国民に宣布されているのであって、それにふさわしく王の表現が権威づけられているのである。これからわかることは、征討記事中の「太王」表現は、ある特殊な場合に限って、特に太王権を浮揚させるために用いられていることがわかるのである。

「太王」例の第二は、六年丙申の百濟王自誓を受けて、「太王恩赦」と現われる。この「太王」表記を「恩赦」と関連させ、広開土王の「道義的優越性」を強調するもの、とする考え

もあるが⁽¹⁹⁾この場合、百濟王が「奴客」を自称して服属を誓ったのを媒介にして、「奴客」・「残主」の上に君臨する、絶対的存在としての「太王」が現出したとみるのが、順理であろう。このような「太王」権の卓越さ、冷酷な政治的支配の貫徹を前提にしてこそ、「太王」の寛大さが意義を有することになり、「恩赦」の表現が生きてくるのである。

さすれば、「太王」例の第三、新羅王上訴を受けて、「太王恩慈、称其忠誠」として現出する「太王」の意味も、自ずと明らかであろう。つまり、新羅王の「奴客」自誓を受けて「太王」が聳立し、その絶対的権威に依拠して「恩慈称其忠誠」が保証されているのである。「太王」に對置された「奴客」とは、新羅王をおいて他にありえない。

「奴客」の実体を新羅王と確定した次は、「民」の解釈に移らねばならない。

辛卯年条の「臣民」を、浜田氏は「倭の臣民」とするのであるが、既述のように、そう断言するには問題がある。そこでこの「臣民」を一応除外して、他の用例を検討する必要がある。

『碑文』では「民」・「属民」・「旧民」・「売勾余民」・「敦城民」・「平穰城民」など、「民」とは例外なしに、『碑文』の主人公たる高句麗（王）の「民」である。

これと関連して、一〇年庚子条の「官軍」と二〇年庚戌条の「隨官」が注目される。『碑文』において、「官」が高句麗国家であることは自明のことであるが、「官民」となって、「官」と一対になる「民」が高句麗民であることも、また自ずと明らかというべきである。

また、「奴客」が「新羅王」であるとなると、朴氏の指摘が生きてくる。新羅王上訴の言葉として、新羅王自身が、自分が倭の民になったと高句麗王に訴えるはずはなく、また、高句麗側がそう把握、あるいは記述する理由もない。

「民」とは被統治者一般の謂で、「臣民」としても結局は同意である。この「（臣）民」は、新羅王自誓の辞のなかに、「奴客」・「歸王請命」と一連のものとして登場しているのであり、決して孤立的な存在ではない。それは次の「忠誠」とも付合しながら、全体として新羅王の服

属を表現しているのである。「奴客」と「民」は、同じ実体を指しているのである。「奴客」とは、牟頭婁の例で明らかなように、臣下の卑称である。それは人格的な君臣関係を表現する言葉であるが、『碑文』の百済・新羅の場合、それは国際的な隷属状態にまで拡大されているのである。「(臣)民」もまた、「奴客」と一対になって、同様の意義を付与されて用いられたのである。

結局、「以奴客為民」の解釈は、朴説が正解で、「奴客(新羅王)は(高句麗王)の民でありますから」、という意味になる。ここで、「奴客」がまた「民」であるという、二重のまわりくどい表現になったのは、史臣が「帰王請命」の前提として、百済王の場合と同じく、「奴客」自誓型式を設定したことに原因がある。「奴客」・「(臣)民」の把握は、実際は翌年の一〇年庚子を待って確立するのであるが、その認識を自誓形式としてここに投入したため、表現が二重になり、屈折したのである。つまり、ここには間接話法が適用されているのであって、「其」もその反映であることは浜田氏が説くとおりである。だからといって、それが文章理解を妨げるということにはなっていない。

浜田氏は、広開土王の征討の結果、百済と新羅はまた「属民・朝貢」関係にもどったとする。「奴客」は「属民」と同範疇の表現であるとするのであるが、ここにも浜田説の限界が露呈している。征討の結果、両国の対高句麗関係は劇的な変化を遂げているのである。

一〇年庚子条の「新羅寐錦未有身来論事」で明らかなように、「属民」時の新羅は「朝貢」はしていたが、王躬らの朝貢ということはなかった。しかし同条末尾に「朝貢」の言葉があるように、この時点をもって新羅王は躬ら「朝貢」したのである。しかもまた、この時を契機に、高句麗軍が新羅城などに駐屯し、新羅王権にも直接関与するような事態が発生したのである。

高句麗に親朝した新羅王は、どのような待遇を受けたのか。『中原高句麗碑文』に、

東夷之寐錦□太子共前部太使者多兮桓奴主簿□□□□□□□去□□到至跪當之。

とあるのによれば、新羅王(東夷之寐錦)は高

句麗太子共などに伴なわれて「跪當」に至り、後文によれば、「高麗太王」から「寐錦之衣服」を賜与されているのである。このことは、新羅王が高句麗の官位制に組みこまれ、高句麗王に臣従したこと以外のなにものでもない。さらに、ここに「跪當」とあるのによれば、六年丙申に百済王が「跪王」したように、跪いて臣従を誓ったと考えてよいのである。このような新羅の対高句麗関係を、多分に名分的な「属民」関係と同一視することは許されないであろう。それは「奴客」の言葉に端的に示されたように、「臣民」関係そのものである。一〇年庚子を境に、新羅は高句麗に「臣民」として「朝貢」したのである。

百済王は、広開土王の前に跪いて「奴客」となることを誓った。換言すれば、「臣民」として服従したのである。そればかりか、五八城七〇〇村を奪われたうえに、多くの人や物を貢献した。そしてその後も「臣民」として「朝貢」することになっていたのである。六年丙申条に「朝貢」の文字がないことから、それを疑うむきもあるが、百済の場合、すぐに高句麗との抗争が再開され、敵国となったので、実際の「朝貢」にまでは至らなかった。ゆえにそれは、ことさら記すべきものではなかったのである。

百済・新羅と同じく、かつて「属民」であった東夫余は、征討後にどうなったかに関心がもたれる。二〇年庚戌条には

餘城国駭□□□□□□□王恩普覆

とあり、この時に東夫余王も帰服したと考えられるが、肝心の部分が欠字になっていて、詳細は不明である。百済・新羅の場合を考慮すると、東夫余王「奴客」の誓詞があり、「王」も「太王」として登場していることが想像されるが、もちろん断定はできない。しかし、帰服した東夫余王を、「恩」によってそのまま許したなどとは、到底考えられないのであって、これ以後、東夫余は高句麗王の「臣民」として隷属したと考えてよかろう。その証拠に、東夫余はその後間もなく、四三五年以前に、高句麗に完全に統合されたのである⁽²⁰⁾。

3. 辛卯年条私釈

前章で、辛卯年条前置文説には矛盾が多いこと、また『碑文』作製当時、新羅は高句麗の「臣民」として把握されていたことを明らかにした。このことから、辛卯年条については、新しく解釈を試みる必要が生ずる。

まずもって確認すべきことは、辛卯年条の「□新羅以為臣民」の主語は広開土王（高句麗）であるということである。倭が新羅を「臣民」にしたという解釈は、文脈上からみても、事実関係からみても、到底成立しがたい。そうすると、辛卯年条には主語が三つあることになる。「百残新羅」「倭」がその二つで、その後のどこかで広開土王が主語になるのであるが、それは省略されている。

「倭」以下で主語が変わるとすれば、それは「来」と「渡」の間しか考えられない。既述のように、「来渡」とはならないからである。そこで辛卯年条は、次のA・Bの二部分に区分することができ、Bの主語は広開土王ということになる。

A. 百残新羅旧是属民由来朝貢而倭以辛卯年来

B. 渡□破百残□□新羅以為臣民

ここでまず留意されることは、Bの「□新羅以為臣民」が、その後に叙述された九年己亥・一〇年庚子を待って実現したことである。さすれば、この一句は征討理由を表わしているのではなく、結果を記録しているということである。それは当然、B全体に及び、Bが広開土王の南方征討の結果を総括した文章であることがわかる。

一方、Aには「辛卯年」という干支が記されていて、それによってAは、広開土王の征討以前の状態、あるいは征討理由を説明していることが了解される。

Aは征討理由、Bはその結果を示していることからして、辛卯年条は全体として、南方征討戦の総括文と称することができる。このような総括文を、『碑文』の構造と内容の両面から矛盾なく説明できるであろうか。

『碑文』の南方征討戦は、対象が個別的では

なかった。そこでは百済・新羅・倭が入り乱れて登場し、その期間も永樂六年から一七年にまで及んでいる。いきおいそれは、征討記事の主要部分を占めることになり、長文で複雑な記事という点では、他の征討記事の追隨を許さない。この長期で複雑な征討戦の戦果は、その都度、比較的詳細に刻記されているが、南方征討戦の全体としての結果、総括は、その最末尾にみられない。しかし、その総括文はあって然るべきであり、是非とも望ましい。

最初の南方征討戦、六年丙申の百済戦は、実際には広開土王即位後の数年間にわたっておこなわれたのであるが、『碑文』ではそれを最終年の六年丙申にかけて集約叙述している。それは字数に制限のある条件のもとで繁雑を避けたためであるが、五年乙未に稗麗戦が介在するためでもある。このような集約叙述の方法を用いた『碑文』にあつては、南方征討戦の総括文が当然予想されるのであり、しかもそれは、末尾より冒頭にある方が、文意はもっと明快になる。位置上では、辛卯年条が総括文であることに問題は無い。

次に、総括内容が以下の征討記事と対応するかどうかである。

まず、Aには百残・新羅・倭とその対象名があげられている。したがって、総括文であるためには、Bにもこの三国が登場しなければならない。さすれば、「破百残□□新羅」の欠字二字のうちの一字は、「倭」でなければならない。征討記事に明らかのように、百済は一時、降服のやむなきに至ったが、その後間もなく倭と通し、ひき続いて高句麗に対抗した。倭は百済とともに敗残の憂目をみたが、高句麗に服従したことはない。ただ新羅だけが一貫して高句麗に従属し、その過程で高句麗の「臣民」となった。したがって、「倭」字は「百残」に続く文字になるほかない。そしてその下の一字は、「新羅を□して以て臣民にした」となるが、一〇庚戌条に「往救」とあるのによれば、それは「救」字を想定するのが穏当である。

Bの最初の二字、「渡□」はどうであろうか。「渡」は旁が確認されるので、ほぼ異論がない。すると未釈字は、「海」か河川名となる。六年

丙申の百済戦記事には、「王躬率□軍」の一句があるが、武田氏が未釈とした一字について、原碑を精査した王健群氏は「水」にまちがいないとする⁽²¹⁾。これが「水」軍である可能性はやはり大きい。また一四年甲辰の倭戦では、倭軍が「連船」侵入してきたのであるから、これも海戦を想定してよい。これが百済・倭戦の全てではないが、「渡海破百残倭」と総括されてもおかしうはなからう。

一方、この未釈字を「涙」とみる見解もある⁽²²⁾。「涙」ならば涙水で、それは現在の礼成江に当り、『三国史記』広開土王紀四年条に、「王与百済戦於涙水之上」とあるように、意味上ではそれにふさわしい。ただ涙水を「涙」一字で表わすことに不安はあり、なお今後の問題は残る。ともかく、「渡□」にも特に矛盾はない。

さらに、Bの主語の広開土王が省略されているという問題はどうかであろうか。それは、この条が総括文であるということに納得される。

具体的な征討記事では、主語の広開土王が省略されていても、「教」・「駕」・「制」など、高句麗の君主にふさわしい用語が配されているので、主体としての高句麗の省略などは元来なかったのであるが⁽²³⁾、総括文の場合はそれが許容されるのである。総括文の場合、征討記事末尾の「凡所攻破城六十四村一千四百」のように、主語は不要なのであり、主語がある方がかえって不自然なのである。Bに欠字がなければ、それは一読して総括文であることが了解され、Bの主語が広開土王であることも明白なのである。

Aは、それで征討理由を説明する文章になっているか。文脈を追えば、百済・新羅は属民で、由来朝貢しており、倭もたんに「来」ただあるだけであるから、高句麗とこれら三国間の関係も不明確で、全体としては、一見、征討理由を説明する文章にはなっていないようにみえる。しかしこれには、それなりの理由があるのである。

『三国史記』によって明らかなことは、三六九年以来、広開土王の即位時まで、高句麗と百済はひき続いて激しく戦火を交えており、三七一年戦役では、高句麗の故国原王がそのなかで

戦死するという事態も起った。広開土王の南進は、この百済制圧を第一の目標としていた。そしてその通り、広開土王は即位直後から連年にわたって百済を攻撃し、『碑文』はその戦果をまず六年丙申条に集約的に敘述した。したがって、『碑文』にはまずなによりも、Aで百済が征討されるべき理由を、他のどの征討対象よりも強烈に特筆し、Bで倭をも破り、新羅を救ったと総括したことから、百済が倭と同盟して新羅を侵したことをやはりAで敘述せねばならなかった。しかしそれでは、簡潔であるべき総括文が余りにも複雑冗長に流れ、以下の征討記事と文章的に重複することになる。そこで『碑文』はAを大胆な省略文としたのである⁽²⁴⁾。省略しても、すぐそれに続く「破百残倭救新羅」でそれは全て明らかであり、それは以下の征討記事に具体的に展開されているのである。「百残新羅……由来朝貢」・「倭…来」などの、事実と乗離したような、漠然とした表現は、それ以外に表現する術がなかったからであり、「而」が「百残」にかからず、「倭」にかかるのもそのためなのである。辛卯年条が総括文であることを積極的に否定する根拠は、ないと考えてよい。

辛卯年条が総括文であるということは、辛卯年条の前置文的性格を排除するのではなく、それを併せもつのである。六年丙申条は前置文を要求するが、それは直前の総括文に溶解して存在する。六年丙申条が総括文にすぐ続く、最初の征討記事であるという、位置上の特殊性がそれを許容するのである。

「以六年丙申」の「以」は、紀年干支の表現としては唯一の例外として存在し、それが前置文説の根拠の一つともなっているが、それは総括文に内包された前置文を受けた、特殊な形式であって、その点についても矛盾はない。

以上で明かなように、辛卯年条は前置文ではなく、総括文なのである⁽²⁵⁾。広開土王の南方征討戦は、長期で複雑な過程であった。そのため、文意を明快にするために、『碑文』はその理由と結果を冒頭に総括文として提示し、六年丙申以下にその具体的な展開過程を詳述した。ここにも『碑文』のすぐれて論理的な性格が確認されよう。

こうして、当該条が辛卯年のことを記しているのではないことが判明すると、それを辛卯年条と呼ぶことも、再考の要がある。それは正確には、南方征討の冒頭総括文とでも称すべきもののなのである。

ここで「以辛卯年」について一言しておかねばならない。

辛卯年は『碑文』によれば広開土王即位年で、『三国史記』によれば、それは同時に広開土王の南進征討が開始された年でもある。しかし『碑文』は、即位直後の数年間の対百済戦を六年丙申に集約したため、広開土王の南進が開始された、この記念すべき辛卯年を刻記すべき場所を失ったのである。それを銘記するとすれば、Aの「倭」にかけるしか方法はなかった。したがって、倭が来たのは辛卯年と特定する根拠は薄弱なのである。一方、六年丙申の対百済戦に倭の影もなく、九年己亥の「和通」をもって、倭は初めて舞台上に登場しているという事実は、この時になって、倭が百済と同盟して高句麗と対抗した、ということを物語っているのである。

おわりに

辛卯年条の解釈が今まで大きく揺れ動いたのは、三つの未釈字があるためである。特に後の二つの未釈字は解釈に決定的な鍵を握っているが、それはどのような拓本によっても、あるいは原碑石の調査によっても、判読不可能とされてきた。それは将来にわたっても絶望的ですからあるのである。

しかし、四～五世の東アジアの政治情勢を論ずる時、辛卯年条をどう解釈するかは、不可避の問題である。そしてその解釈が、三つの未釈字にある意味の文字を想定することに帰着していくことになるのも、万やむをえないことである。前置文説を含めて、そのこととは全く無関係に成立する学説はないと、筆者には考えられるのである。問題は、それが『碑文』全体の構造（型式と意味）に最も適合的であるかにかかっているものであり、本稿はその意味での私釈である。

本論での論述をふまえ、最後に当時の東アジ

ア情勢を概括すると、次のとおりである。

早くから東アジアの強国となった高句麗は、四世紀代に百済・新羅・東夫余を網羅した、高句麗の「属民」圏を形成していた。北夫余はすでに基本的に高句麗に統合されており、高句麗は東アジアの盟主的存在として、それら三国との間に一定の政治的支配関係を形づくっていたのである。

しかし四世紀中葉以後、これら「属民」圏の国家が高句麗文化を摂取して相対的に発展し、一方、西方で慕容鮮卑が高句麗の強大な敵対勢力として登場するや、百済と東夫余は自立を計って活発に動き出し、特に百済は、一時的に高句麗に戦勝するまでに至った。広開土王即位頃には、新羅を除く「属民」圏は崩壊しており、特に百済は南方における高句麗の主要敵対勢力に成長していたのである。

このような情勢下に即位した広開土王の対外戦略は、なによりも百済制圧を第一目的としていた。そのため、新羅を政治・外交的により強力に掌握し、対百済戦に協同步調をとらせながら、即位直後から活発な百済攻撃を展開し、三九六年には遂に百済王を降服・臣属させたばかりか、多くの領土を奪取することに成功した。

こうして高句麗は一挙に南方で優位を占めたが、百済も座視して滅亡を待つ弱小国家ではなかった。百済は七支刀の時代から国家関係のあった倭と同盟し、三九九年には百済・倭軍が高句麗・新羅に全面的な反攻を準備したのである。しかし百済の高句麗攻撃は未然に挫折し、新羅に侵攻した倭軍は高句麗軍に撃滅された。以後、新羅には高句麗軍が駐屯し、新羅王は高句麗王の「臣民」として、その強い隷属下に生き長らえることになった。百済と倭は、ひき続いて高句麗に対抗して失敗したが、これらの戦役がその後の両国の政治史に深刻な影響を与えたことはいままでもない。海の彼方にあったとはいえ、これら一連の事件が倭国の歴史に与えた影響は、本質的なものであったことが想定されるが、これについては残された課題が多い。

広開土王は四一〇年、東夫余を親征して臣属させた。それが東夫余に与えた衝撃が巨大なものであったことは、その後間もなく、東夫余が

高句麗によって統合されたことにより推察されるのである。

ともあれ、広開土王の征討は、巨大なうねりとなって、東アジア情勢を一変させたのである。

注

- (1) 武田幸男『高句麗史と東アジア』岩波書店、1989年、430～433頁。
- (2) 浜田耕策「高句麗広開土王陵碑文の研究」(『朝鮮史研究会論文集』11、龍溪書舎、1974年)。以下、浜田説はこの論文により、繁雑を避けて頁数は省略する。
- (3) 武田幸男前掲書、詳細は以下参照。
- (4) 鄭寅善「広開土境平安好太王陵碑文釈略」(『白樂濬博士還甲記念国学論集』延世大学校、1955年原載。日訳は井上秀雄・旗田巍編『古代日本と朝鮮の基本問題』学生社、1974年、25～26頁)。
- (5) 武田幸男前掲書、174～177頁。
- (6) 武田幸男前掲書、179～186頁。
- (7) 山尾幸久『古代の日朝関係』塙書房、1989年、127頁。
- (8) 拙稿「永樂一〇年、高句麗広開土王の新羅救援戦について」(『朝鮮史研究会論文集』27、緑蔭書房、1990年、164～171頁)。
- (9) 西嶋定生「広開土王碑文辛卯年条の読み方について」(『三上次男博士喜寿記念論文集』歴史篇、平凡社、1985年、196～203頁)。
- (10) この点は武田氏も西嶋説に従いながらも、「疑問は残る」としている。(前掲書、183頁)。
- (11) 武田幸男前掲書、114・125頁。
- (12) 拙稿「高句麗の建国神話と夫余」(『古代文化』42巻1号、1990年、4～6頁)。
- (13) 末松保和『新羅史の諸問題』東洋文庫、1954年、117～119、154～163頁。
- (14) 山尾幸久『日本古代王権形成史論』岩波書店、1982年、254頁。
- (15) 拙稿(8)、169～171頁。
- (16) 鄭寅善前掲論文(4)、28頁。
- (17) 박시형『광개토왕릉비』평양、1966年、190～191頁。
- (18) 武田幸男前掲書、140～142頁。
- (19) 武田幸男前掲書、254～256頁。また氏は、『牟頭婁墓誌』で、「国岡上広開土地好太聖王」に對置された「奴客牟頭婁」についても、「奴客」と「聖王」が對置するとする(339頁)。しかしこの場合でも、「太王」を排除すべき理由はなく、やはり本来的には、「奴客」は「太王」に對置するものというべきである。
- (20) 武田幸男前掲書、146頁。拙稿(12)、6～7頁。
- (21) 王健群「好太王碑の研究」雄渾社、1984年、127頁。
- (22) 손영중「광개토왕릉비 왜관제기사의 올바른 해석을 위하여」(『역사과학』1988-2、평양、31頁。)
- (23) 武田幸男前掲書、158～159頁。
- (24) 浜田氏は、「東夫余旧是鄒牟王属民中叛不貢」を辛卯年全体と同性格のものとして對比するが、それ

は六年丙申条が前置文そのものを要求するという前提にたつての判断である。辛卯年条が前置文そのものであるかどうかは、まずその解釈自体が先行して決定されるべき問題であり、浜田説は再検討を要する。東夫余条と對比してわかることは、百濟に対して「中叛不貢」よりもより強烈な表現が「由來朝貢」以後にあるべきであるが、それがないという事実である。それはあまりの繁雑を避けるためと、かつ、ここで書かずとも以下に展開されるので、省略したということ以外に説明できない。

- (25) 金永萬「広開土王碑文의 新研究」(『新羅伽倻文化』11、大邱、1980年)は、辛卯年条を広開土王南進征服の「集約文」と規定し、結果的には本稿と同様の結論を出している。しかし、その立論の基礎は、「由來朝貢」を「由未朝貢」と釈文する点にあって、拙論とは出発点を異にしている。「來」を「未」と読む金氏の釈文が正確でないことは、劉永智(胡凱・鈴木靖民訳)「好太王碑辛卯年記事の探求」(『国学院雑誌』87-4、1986年4月)で明らかにされており、金説はその立論の基礎が成立しない。また金氏釈文を基本的に継承した、徐榮洙「広開土王陵碑文의 征服記事再検討(上)」(『歴史學報』96、서울、1982年)、「(中)」(同119、1988年)も、同様の批判を免れない。徐氏は、それに加えて、各紀年記事ごとに集約文を摘出ししようとするが、成功していない。

なお、本稿で辛卯年条を総括文としたのは、六年丙申条が一般に集約文といわれており、辛卯年条はそれとは性格が異なるためである。

[付記] 本稿の基本内容は、1990年8月に大阪で開催された第三回朝鮮学国際學術討論会(大阪経済法科大学、北京大学共催)で発表した。